

秋山もえ

最終日は、初代牧之原市長の西原茂樹氏による「対話による協働のまちづくりを語る！」という特別講演を聞きました。あらゆる市の計画策定に市民が関わるしくみを条例のなかに明記していることに驚きました。パブコメだけではなく、ワークショップを開き、とことん対話をして、形だけではない市民協働を進めてきたことが生き生きと語られました。公共施設マネジメントについても、担当課がコンサルタントにお願いし作ってしまったものを、これではダメだと、市民との対話の場をつくってやり直した、という徹底ぶりです。

市民との対話を大事にする、という上で、ファシリテーション能力（進行能力）をつけていく、向上させていく必要性については、目からウロコでした。相手に寄り添い、否定せず、相手の話を聴く力の重要性についてくり返し語られました。西原氏が市長の時代、納税課に乗り込んできた市民を市長につないでもらい、ゆっくり1時間ほどかけてその市民の話を聴くと、「おれも税金を払わないと言ってるわけじゃないんだよ。職員の対応が悪かったから、しっかり言っと思ってくれよ」と笑顔で帰っていったという話などは、聞いていてとても清々しい気持ちになりました。市が勝手に物事を決めて進めず、市民が名実ともに主人公になっていると、いろんな知恵もでてくるという事例がたくさん紹介されました。学校の統廃合計画についても、じゃあこういう使い方ができないか、私が引き受けるよなど、市がおおよそ考えもつかなかった方向に話が進む例がいろいろあることがわかり、ワクワクしました。

西原氏は「主役は市民。市長は、市民が話し合っている、その場にいることが大事。何かを話すのが大事なのではない。市民にとって、市長が自分の話を聞いてくれているということが大切」と。また「国政、県政、市政あらゆるレベルで話し合う場づくりが必要。推進の立場であろうとも、反対の立場であろうとも、合意形成が必要だとすると、そのプロセスを抜きにしてはならない」と。すべてのことがトップダウンで決められることを良しとせず、まずは自分の足元からNOの声をあげ、建設的に話し合う場をもつ努力が大事なのだと胸に刻みました。

学びの多かった2日間。ここで学んだことを、今後の活動に120%生かしていきたいです。